2004年度 第2回 環境セミナー

「緊急災害対策を考えよう」新潟県中越地震を体験して

髙　田　洋　子

今日は2004年10月23日に新潟県中越地方を襲った大地震に遭遇した私の体験を通して、突然の災害から身を守るために日頃からどのようなことをすべきか、ご一緒に考えてみたいと思います。

＜新潟での仕事を終えて＞

敬愛大学の地方入試の仕事で、私は前夜の10月22日（金）から新潟市に宿泊していました。23日の昼前には、駅前の代々木ゼミナールでの入試業務を終えることができました。午後は、新潟県立歴史博物館や戦前の新潟における新興ブルジョワジーとして有名な新津家の洋館建築などを見学しました。美味な「のっぺい」を食べ、お土産を買って17時19分発の上越新幹線に乗車し、帰宅の途につきました。大宮に19時頃に到着の予定でした。車窓から夕闇に沈む中越地方の風景を眺め、この日の面接試験のこと、初めて知った信濃川河口の開拓史のこと、新潟市の歴史・風物、人々の様子などを思い出していました。

＜マグニチュード6.8の衝撃＞

私が乗った新幹線が長岡駅を出たのは17時44分、浦佐駅を通過したのが17時56分頃。その２分後の17時58分に、大地震が発生しました。震源地となった川口町は、長岡駅と浦佐駅のほぼ中間にあります。そこで川口町の通過時刻を17時50分頃と考えれば、震源地を通過したのは、地震が発生した８分前ということになります。そして、長岡駅の近くで脱線した新潟行き下り新幹線（とき325号）と私が乗っていた東京方面行き上りの新幹線（とき332号）は、17時50分から17時56分の間に川口町の少し手前（浦佐寄り）で、すれ違ったことになるわけです。

数日後の朝日新聞には、もし地震が５分早く発生していたら、脱線した下りの新幹線にもう一方の上りの新幹線が衝突して大惨事を引き起こした可能性があると書いてありました。何ということでしょう！ほんの数分間ずれていたおかげで、私は辛くも命拾いをしました。

あの時、私が乗っていた新幹線は突然、経験したこともないほど左右に大きく揺れ続けて、やっと止まりました。そして安堵する間もなく、その後何回か大きな余震に見舞われました。高い橋梁の上で、少し右にカーブした線路に傾いたまま止まった新幹線はその度にグラグラ揺れて、生きた心地もしませんでした。私は椅子の下に身をかがめて、肘掛けを掴んでいました。携帯メールで「地震に遭遇」、新幹線は「Max332」と、急いで家族に

送信しました。

＜止まった新幹線の中で＞

少し落ち着くと、車内では人々が「恐いですね。」「どうなるのでしょう。」と、知らない者同士、自然に声を交わし始めました。近くの座席の人が持っていた超薄型携帯ラジオを皆さんと囲んで、地震の震度や震源地についての情報を得ることもできました。あまりに余震に怯える私を見て、「新幹線の橋梁はよほどのことがない限り崩れ落ちることはない。阪神大震災の教訓から強化工事が施されているはずだから。新幹線自体は重心がかなり下にあるので、転がり落ちることはありえない。自分は１級建築士で東京都の防災ボランティア・応急危険度判定員だから保証する。」と、詳しく説明して下さった人もいました。専門家にそう教えられて、私はやっと安心立命。「有り難い。」と感謝しました。

送電がついに止まると、車内には自家発電の青白い応急灯が点きました。地震発生からしばらく経って携帯電話は全く通じなくなっていましたから、公衆電話には列ができました。後から聞いた話ですが、ある会社員は万が一の時を想定したのか、「○○ちゃん、ありがとう。僕の人生は幸せだったよ…。」などと「最期の挨拶」をされていたそうです。やっと順番が回って受話器を取っても、手が震えてテレホンカードがなかなか入らなかったり、逆さに入れてしまったり、人々は相当に動揺していたようです。

空腹を訴える人が出てきたので、私はお土産に買った最中を周りの人たちに配ったりしました。乗っていた車内にはお年寄りのグループがいて、彼らは常に冗談を言いながら笑いを振りまいていました。情報を届けてくれるラジオの声がかき消されるため、実は初めはうるさく感じていたのですが、だんだん、それは困難な時をいくつも乗り越えてきたお年寄りの強さであること、落ち込んでいく心を励ます効果があるのだと考えるようになりました。

＜大和町立体育館へ＞

新幹線の車内で一晩を過ごすのだろうと諦めていたら、夜中近くになって、「受け入れてくれる避難所の確保ができたこと」、「これから浦佐への救出活動を始めるが、１号車のお客から順番に、マイクロバスとタクシーでピストン輸送を行って救出する」と車内放送がありました。スピーカーから流れてきた緊張して少し震えるような乗務員の人の声に、かえって不安が拡がりました。車内は安全と思っていましたが、事態はもっと深刻なのだと理解しました。

とはいえ、人々が混乱する場面は全く見られず、我先に出口に殺到する人もいませんでした。皆、お年寄りや気分の悪い人はいないかと順番を譲り合っていましたし、この点は本当に今でも感慨深く思い出されます。だいぶ待ってから線路上に降り、少し歩いて作業用の？階段で地上に降りました。待っていたマイクロバスにすぐ乗り込み、真っ暗闇の中をバスは20分ほど走って、避難所の体育館に到着しました。中に入ると、「ひんやりとして寒いな。」と感じました。けれども、提供されたわずかな毛布を奪い合う人もいません。だれもが整然と行動しました。

広い体育館の中も、もちろん停電で真っ暗。野

球の照明灯のような大きなライトが中央の壁際に置かれ、それをとり囲むように到着した人々が次々と折りたたみのパイプ椅子を並べて座りました。使い捨てカイロが一人一つずつ与えられました。しかし、時々ゴーッと地の底から聞こえるような地鳴りがしたかと思うと、体育館の天井を支える金属の骨組みが強い余震でギシギシ鳴り出し、天井から吊るされた大きな電灯はユサユサ揺れ、今にも頭の上に落ちてくるように見えました。その度に、私の恐怖心は極度に高まりました。危険が迫ってくるような、絶望感のようなものを感じました。「寒さと恐怖の中で夜の間ずっとここに居るなんて到底できない。」と、私は思い始めていました。本当に病気になりそうな気がして、来週からの仕事に差し障るのではと思えてきました。

＜湯沢町へ脱出＞

私は車内で隣席だった女性（Ｏさん）と並んで座っていました。すぐにうち解けて、たくさんおしゃべりをしたように思います。後に（翌日）名刺を交換して、中学校の校長先生だと知りました。実は、運良く彼女と私は、避難所の体育館から数時間の後には湯沢町に移動することができました。自分の奥さんを案じて避難所となった体育館を探し当てて来た人（Ｓさん）が、「自家用車に空席があるから湯沢まで行く人はどうぞ。」と言って下さったのです。

越後湯沢に疾走する道すがら、車窓から暗闇の中で点々とたき火を囲む人達の姿を見ました。今でも目に焼き付いています。その時は、なぜそんなことをしているのか分かりませんでした。余震でいつ崩れるかもしれない家の中より外の方が安全だったということを、後日知ることになりました。私は走行中に車が地揺れで転倒したり、崖下に落ちたりする危険を感じました。急いで携帯メールで「越後湯沢に車で移動中、行き先はＴホテル」と家族に送信しました。

同行したＯさんは、40年ぶりの高校の同窓会に参加するため、新潟市から湯沢町に行く途中でこの地震に遭われたのでした。湯沢町に着くと、そこでは夜中の12時半頃に送電が回復したそうで、明るさを取り戻したホテルの部屋で同窓生達は宴会を再開していました。その輪の中に、飛び入りの私までが暖かく迎えられました。もう夜中の２時半を回っていたと思います。

地震が発生した時、湯沢のホテルも部屋の大型テレビが転がってしまうほどのひどい揺れだったそうです。宿泊客は全員一階のロビーに集められ、電気が復旧するまで部屋に戻ることは禁じられたとのこと。夕食が運ばれる寸前だったので、ひっくり返った食事は全部棄てられて、おにぎり１個だけが配られたそうです。幼い子供たちは泣き叫び、ホテルに雇われたアルバイトの若い女性達もおろおろとすすり泣くばかりだったそうです。

＜翌朝、上京して＞

朝になって、初めてテレビで各地の惨状や中越地方全体の被害を客観的に知ることができました。改めて、地震がもたらす人間への影響に衝撃を受けました。私自身は幸運にも地震発生の夜に蒲団の上で眠ることができ、全身の緊張と疲れを癒すために翌朝には温泉に入ることもできました。本当に周りの方々のご親切のおかげでした。

越後湯沢駅からは、東京方面行きの新幹線が１

時間に１本くらいの頻度で動いていました。大宮に着くまでの新幹線の車中では、半ば放心状態。いつもの乗換駅である南浦和に降り立った時の気持ちは忘れられません。それは先ほどまで私が呼吸していた被災地の空気とは、全く違うものでした。まるで気の抜けたビールのように弛緩した世界だと感じました。反面、私の心身がまだその時も隅々まで恐怖にこわばり、いかに張りつめていたかが自分で分かりました。そのことに、ひどく驚きました。

＜被災から今考えること＞

さて、あれから数週間が過ぎました。私は、2004年10月23日の新潟県中越地震の現場に単に通行人として遭遇しただけですが、あの衝撃を今でも忘れることはありません。不思議なことに、時間が経つにつれて、ますますその体験を考え続けている自分に気付かされます。

あの時を振り返ると、自然の大災害に見舞われた時に正しい情報を的確に得ることがいかに大事か考えさせられます。そのためには気持ちを閉じて孤立するのではなく、人々と連帯すること、自らも人の輪に積極的に関わっていく気持ちが必要だと思いました。

また、突然の衝撃に誰もが動揺していたはずなのに、あの時人々は本当に冷静に行動し、秩序を保ち続けたことは、今でも鮮やかに思い出されます。それは隣人に対する大きな信頼と申しましょうか、本当に成熟した社会の証なのかもしれません。それは一朝一夕にできるものではないだろうと思われるのです。

自然の大災害に出会って、日常と非日常は、本当に紙一重なのだと考えさせられました。「人間の造り上げた社会も、実は大きな地球環境に包み込まれたほんの一部分でしかない」と今更ながら思い知らされます。

お世話になったＯさんとＳさんとは、その後も交流が続いています。Ｓさんからのお便りには、湯沢町の温泉街は地震発生以来予約のキャンセルが続き不況の深刻化に加速度がついてきたこと、また、六日町の旅館に避難した被災地の高齢者を訪ねるボランティア活動をしていると、お年寄りの言葉にむしろＳさん自身が励まされ幸せを頂いている、と書いてありました。

インターネットのホームページで見ると、Ｏさんの勤務先は毎春たくさんの桜の花で校舎が埋もれるという山地部の中学校ですが、今年は閉校になるそうです。彼女は、人々の思い出の詰まった中学校の長い歴史を閉じなければならないお仕事に、一生懸命勤めておられるようです。

あの日の体験を共有した者同士の絆を、私はこれからも大事にしたいと考えています。被災地の人々に私でも何かできることがあれば、ＯさんやＳさんに色々と現地のことを教えて頂きながら、やっていきたいと思っています。御清聴ありがとうございました。